3月11日 そのとき

会員　中嶋 靖史（47 期）

水戸地裁龍ケ崎支部

私は，水戸地方裁判所龍ケ崎支部の庁舎内で今回の大震災に遭遇した。その日は個人再生の債務者審尋であった。期日は３月11日午後２時30分，２回目の審尋だった。２時20分頃裁判所に到着し，依頼者と２人，裁判所の廊下で順番を待っていた。しかし，時間になっても２件前の事件をまだやっていた。そして，運命の時を迎えた。

「がたがたがた」と上下に小刻みに揺れる初期微動を感じた。その直後48年間の私の人生の中で最大の地震がやってきた。揺れの大きさもさることながらいったんおさまったかなと思うとまた大きな揺れがやってきて，その長さに恐怖を感じた。幸いにして廊下には倒れるような物もなく，立ってられないというほどではなかったが，安全なところにしゃがんでただひたすら揺れがおさまるのを待つしかなかった。

青空審尋

揺れがおさまったところで，全員，書記官の誘導で裁判所の広い駐車場に避難した。その間も余震が続く。危険なので今日の手続はすべて中止するとの発表があった。しかし，この交通の便の悪いところにもう一回というのはいかにも辛い。既に提出済の書面で判断してもらえないかとお願いしたところ，駐車場で審尋を行うことになった。青空審尋という貴重な体験であった。

商店街の惨状に愕然

駅まで続く商店街通りに出たとたん，その状況に愕然とした。ショウウインドウのガラスが割れ，屋根瓦が落ちて歩道上に散乱している。ちょっと時間がずれていたら地震の時にここにいたのかと思うとゾッとした。余震の度に駐車場に避難しながら竜ヶ崎駅にたどり着いた。

とりあえず佐貫駅までタクシーで移動する。電車が動き出す気配はない。とてもじゃないがここから自宅まで歩いて帰ることはできない。ここで一夜を明かすことになるだろうという覚悟は早いうちからできていた。JRが車両を開放してくれたので，そこで休んでいた。これは快適だと安心をしていたら，夜の８時頃だろうか，駅員が来て車両転覆の危険があるという理由で車外に出され，駅構内からも閉め出されてしまったのである。

公民館で一夜を明かす

改札前で途方に暮れていると，駅員から近くの公民館に案内するとの知らせがあった。これは助かったと思い後を着いて行った。大きな通りをまっすぐ歩いていったが，その通りが停電地域の境目になっていたらしく，右側は停電で真っ暗だった。公民館には既にかなりの人が避難していた。駅からの人だけでなく近所の人もいたようである。毛布，水，非常食などが支給された。相変わらず余震は続いていたがそれでも何とか仮眠をとることができた。

ところが夜中の３時頃から大きな余震が続くようになり，立て続けに緊急地震速報が鳴り響いた。自分の１台でもびっくりするのに，50人はいるであろう大きな部屋のあちこちで鳴り響かれてはとても寝てはいられない。結局その後一睡もできなかった。

電車の姿に思わず涙が

朝６時過ぎに公民館を出て佐貫駅に向かった。駅前にはまだ誰もいなかった。とりあえず取手までタクシーで移動することにした。７時には運転再開という報道だったが取手の駅はシャッターが閉まったまま。程なくして駅構内には入れたがホームで待つこと約２時間半，ようやく10時前，駅に電車の到着をつげるあのチャイムとアナウンスが流れた。毎日聞き慣れた放送だが，ひどく懐かしく感じたのは私だけではないだろう。そして，遠くの方に電車の姿が見えゆっくりとプラットホームに入ってきた。その姿を見て思わず目頭が熱くなった。

＊　＊　＊

我孫子までは徐行運転だったが，その先は通常運転で無事大手町まで着き，事務所に立ち寄ってから家路についた。そこから先は普段と変わらない情景だった。

震災直後真っ先に考えたのは，家族や事務局員の安否である。かろうじて携帯メールの送受信はできたが，かみさんとはそれもできず連絡がとれたのは夜10時過ぎであった。私は帰りたくても帰れない状況ではあったが，あのような時にはじたばたせずじっと復旧を待つのが賢明だと思う。夜中大勢の人が徒歩で帰宅したようだが，あれは危険である。公民館での一夜はまんざらでもなかった。